

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

先日、熊本県立劇場で「能でよむく漱石と八雲」という公演を行いました。阿弥陀寺さんの「語りの会」でお馴染みの浪曲の玉川奈々福さんや、1000分de名著で一緒に、

「飲み会は楽しい！」

お寺でも一緒に演奏した琵琶の塩高和之さんも一緒にです。木ノ下歌舞伎主宰の木ノ下裕一さんとのトークもありました。演目は、夏目漱石の『夢十夜（第一夜）』と『吾輩は猫である（鼠の段）』、そして小泉八雲の『破られた約束』でした。小泉八雲といえば『耳なし芳一』や『雪女』が有名

ですが、この『破られた約束』は、小泉八雲のひ孫の小泉凡さんに「八雲の作品で一番怖いのはなんですか」とお尋ねしたら教えてくださった作品です。今度、阿弥陀寺さんでも上演しますね。じわじわくる怖さの怪談ですが、それはともかく…公演後に、久しぶりに阿弥陀寺さんにお邪魔しました。

コロナ禍になってから寺子屋もできていませんし、玉川奈々福さんとの語りの会もできていません。子どもたちの合宿もです。久しぶりの阿弥陀寺でした。むろん、玉川奈々福さん、塩高和之さんも一緒にです。本当に本当に本当に久しぶりに飲み会になりました。これ

楽しくて、楽しくて、楽しすぎて、こんな楽しさ、忘れていたなあと思いました。公演の中のトークで、私が「蟹が好きだ」と言っていたのを聞きに

なり、ご門徒の方がわざわざ蟹しゅうまいを阿弥陀寺さんまでお持ちいただいたりして、これがまた大感激です。気のおけない方たちと楽しく飲み明かす、これほど楽しいことはありません。みんなで極楽に行こう 私はまだ六十五歳ですが、亡くなった友人がずいぶんいます。否が応にも「死」について考えるようになります。死ぬの何がイヤかという、やはり仲のいい人たちと会えなくなることです。聖典やお経に書かれる天国や極楽は苦しみのない安楽世界です。食事だつて、飲み物だつて満ち足りている。悪い人もいない。そりゃあいいところですよ。もし、運よく天国や極楽に行くことができます。でも、誰も知り合いない。だから地獄の方がいい、なんてことをいう人すらいますが、やはり安楽世界のほうがいいですよ。さらに、その安楽な極楽浄土に、阿弥陀寺さんに集う方たちが集まったら、なんと楽しいことか。なんて思っていたら、どうやら極楽浄土はそんな世界らしいのです。晩年の親鸞聖人が門弟である有阿弥陀仏に送った手紙の中に次のような言葉があります。「自分はもうすつかり年を取りました。きつとあなたより先に往生するでしょうから、極楽浄土で必ず必ずあなたをお待ちしてますよ。」（この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまちらせ候ふべし）」

親鸞聖人は極楽浄土で有阿弥陀仏を待っているとおっしゃっている。親鸞聖人も有阿弥陀仏も極楽浄土に行くのですね。「そりゃあ、そうでしょう。親鸞聖人もご門弟も、みんな偉い人だから極楽浄土に行けるでしょう。でも、自分はずっと無理そう」と思っていたら、しやる方、ご安心ください。お念仏を一度でも唱えれば、極楽往生ができるということになります。阿弥陀寺さんでも一度でも「南無阿弥陀仏」と唱えたことのある方は、阿弥陀様や菩薩様のいらっしゃる極楽浄土に往って生まれ変わる（往生）ことができるのです。みんなで行けば地獄も極楽

んべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもって存知せざるなり」とおつしやうつてるところです。

隣には沢村豊子師匠が涼しそうな顔で三味線を弾いている。地獄の鬼たちは涙を流しながら聞いています。

「法然上人にならダメされて地獄に墮ちても、後悔なんてしません」

奈々福さんの浪曲を聞いて大笑いしてしまい、叱れなくなってしまう。

「うわっ！こんなはずじゃなかった」と思う。

安田は安田で「高砂や〜」なんて鬼たちに教えている。「そこは違う。もつと大きく謡うんだ」なんて焦熱地獄の熱く

「ごめんごめん。私もこつちに来ちゃいました」なんていう。

それを遠くから、義文師や親鸞聖人、そして法然上人がニコニコしながら見守っている。

「でも、ほらあそこに奈々福さんも安田さんもいるから」と。

「じゃあ、そろそろ宴会にしましょうか」なんて檀家総代の森さんが言い出し、血の池地獄の血をお酒に変えて酒盛りを始める。そして、みんな

義文師の指さす方を見ると、玉川奈々福さんが叫喚地獄さながらの大きな声で浪曲をうたって

でわいわいと談話をし、酔いが回ると歌を歌う。そんな地獄なら楽しいかも。

どうせなら楽しく

昔と違っていまは、地獄も極楽も信じないという人が多くなっています。死んだら「無」になると思っている人が多い。そういう人は「死後の世界を見たことのある人はいないんだから」なんて言います。

確かにそうです。だからといって「無」になるという話にはなりません。これをちよつと考えてみたいと思うのです。

この話を(A)わかっていること(B)わかっていることに分けてみます。

(A)死後の世界を見たことのある人はいない。(B)死んだら「無」になる：あるいは極楽や地獄に行く。

まず(A)の「死後の世界を見たことがある人はいない」ですが、これも「見た！」という人がいます。しかし、その人が写真を撮って来てくれ

たり、あるいは動画でも撮影して来てくれたりすればそれも信用できますが、本人が「見た」というだけではちよつと信じられません。そこでここでは「死後の世界を見たことがある人はいない」ということで話を進めます。

さて、となると「死んだら無になる」のか「極楽や地獄に行く」のかはどちらともわからないということになります。だからどつちでもいいのです。これが親鸞聖人のおっしゃる「そんなこと知りません(総じてもって存知せざるなり)」です。

「無」になるといっても信じなければいいのに、なぜこちらを信じるのでしよう。そこでふたつ目の理由です。

「死んだら「無」になる」といいますが、これは「無」になるよりも、「極楽往生」の方がいいのではないでしようか。

しかし、はつきりわからない場合、どうも人は自分につらい方を選んでしまいがちになると心理学者のアルバート・エリクスは言います。

たとえば「会社をクビになった」という事実があったとします。そのと

き：「あんなにいい会社はなかった。自分はもうダメだ」というものから「やった！これで新しいことにチャレンジできる！」というものまで、その間には無数のオプションがあるはずですが、しかし、多くの人は「自分は今もうダメだ」を選択しがちになる、そうエリクスは言います。

「死んだら「無」になる」といいますが、これは「無」になるよりも、「極楽往生」の方がいいのではないでしようか。

しかし、はつきりわからない場合、どうも人は自分につらい方を選んでしまいがちになると心理学者のアルバート・エリクスは言います。

たとえば「会社をクビになった」という事実があったとします。そのと

き：「あんなにいい会社はなかった。自分はもうダメだ」というものから「やった！これで新しいことにチャレンジできる！」というものまで、その間には無数のオプションがあるはずですが、しかし、多くの人は「自分は今もうダメだ」を選択しがちになる、そうエリクスは言います。